

湯治場から地域社会の共同態を問う

—肘折温泉郷の伝統的な湯治客動向を事例として—

明治学院大学 社会学研究科博士後期課程
永岡圭介

今からおよそ 100 年前、作家田山花袋は温泉案内書『温泉めぐり』の中で、わが国の代表的な温泉場を紹介するとともに浴客の退屈凌ぎの様子や風情も描いた。温泉大国のわが国は、現在に至って観光と保養の対象として親しまれる傍ら、温泉場とほぼ同義に扱われている湯治場ははたして近代的ツーリズムに押されて残存したものなのだろうか。そして、大半が中山間地等に位置する湯治場は、人口減少・過疎化の中で、地元の共同浴場として存続するのみならず、周辺地域・遠隔地からの人々の移動と交流が継起することから共同態を成していると考えられなくもない。

本報告では、先ず湯治がわが国に社会的に定着した背景について、江戸時代後期の湯治場の長期滞在と湯宿のもてなし、さらに湯治場周辺地域の農家の生活形態と代々継承される湯治慣行の事例研究を概観し、湯治場は近代的ツーリズムとは異なった経路で、社会的に反復される現象として生きながらえているものとひとまず想定したい。

次に、2014 年に行った肘折温泉郷（山形県最上郡大蔵村）の湯治客の近年の動向に関する実態調査および湯宿へ聞き取り結果をもとに、湯宿は物見遊山にやや近い観光客と伝統的な湯治客をどのように識別し対応しようとしているのかを見出す。肘折温泉郷はツーリズムのあおりをあまり受けにくいとされるが、大半の湯宿は湯治部屋（自炊棟）と旅籠を分けプランとして分けて提供している。これは伝統的な湯治客への配慮である一方で、物見遊山の泊観光客への対応としての近代的ツーリズムへの備えとも捉えられる。

しかし、伝統的な湯治客が必ずしも湯治部屋や湯治プランを選択するとは限らない。この点では、湯治客の滞在日数や継続的な利用実態をはじめ、様々な要素との兼ね合いで観光客と識別されねばならないであろう。ではいったい伝統的な湯治客とはどのように特定されるのか。特に変化の無い同じ場所に、農閑期という半年や一年単位で反復して湯治場に逗留するのは、非日常ではなく「もう一つの日常」として彼等の生全体の中で埋め込まれた慣行であり、いわば「社会的生（生理）」もしくは「社会的季節」と言い表されるものとして考えられる。

湯治場を見つめ直すことから拓がる知見としては、一つは人口減少・過疎化の進行に対して施される自治体発の地域活性化や民間も含めた観光開発に拠らずとも、周辺地域や遠隔地からの人々の移動や交流の継起が地域（間）共同態を成している（既に静かに息づいている）ということである。いま一つは、伝統的な湯治場が反復的であり代々継承されている慣行であることからして「もう一つの住まい」であり社会的には「もう一つの故郷、もう一つの近隣」として機能しているかもしれないという点である。それは、花袋が言う「温泉はどこかなつかしいもの」にも通じるであろう。